

## 9 あとがき

国連人口基金の92年版世界人口白書によれば、地球上の人口は2050年には100億人に達する見込みであると報じている。このような人口圧力に対応しうる新技術の開発は、農林工学分野に固有な手法でもってどの程度可能なのであろうか。農林工学手法の食品の安全性への関与も含めて、今後論議が深まっていくものと思われる。生物生産資源のリサイクルなど過去に目が行き届かなかつたり、適切な手だてを講じなかったところが当面論議の対象となりうるであろうし、また併行して新技術の開発によりこの種の社会性の強い問題に一層関心が集まることにもなるであろう。そして、人工資源に対置する生物生産資源の利・活用は従前にも増して社会的注目度を高めることになると考えられる。研究態勢も個人から集団へ、国内単位から国際共同研究へ、さらにinter-disciplinaryからcross-disciplinaryへと変貌していく側面をより強く示すことになるのではなかろうか。

本冊子は、このような社会の変動への対応を意図した教育・研究体勢の在りようについて、特に今後各年度ごとに本農林工学系が取り組んでいる姿をとりまとめて学内外に伝えようとするものである。各位の忌憚のないご批判ご意見を期待している。

(小池記)

平成3年度 編集委員  
小中 俊雄 (委員長)  
黒田 健一  
小池 正之  
佐久間泰一  
山口 智治